

松任谷 正隆の

僕のひとりごと

30

VOL.30 松原の家の話（続きその1）

前号の続きである。家賃24万円の松原の家。5年近く住んでいたような感覚なのだが、計算をしてみると実際は1年半強だったようだ。それだけ濃い毎日を送っていたということなのだろう。1年ほど活動を休止していたかみさんが、本格的に活動の再開を決断したのもこの家だった。

家事と両立出来るか心配だからお手伝いさんを頼みたい、ということになり、確か家政婦センターみたいなところで手配してもらった。

どんなペースだったかは覚えていないが、週に数回だった記憶がある。最初の頃は毎回違う人が来た。感じのいいおばさんもいたし、感じの悪いおばさんも来た。

でも、最終的には、そのセンターで契約をしている人ではなく、そこで事務をやっている人がうち担当みたいなことになっていった。我々はまだ20代。当然、お手伝いさんは年上である。働いてもらう、というよりは働いていただく、いや、手伝っていただく、という感覚だった。いやはや、気を遣うのなんのって・・・。

お手伝いさんには旦那さんがいて、その人は僕と同じ大学出身、つまり先輩だと言うから、ますますこっちの肩身は狭かった。それでも最初のうちはお互い気を遣い合っていたから、まだなんとかやっていけてたのだと思う。

妊活をしていたが諦めた、と聞いて、我が家で飼っていた2匹の犬のうちの1匹をあげた。

まあ犬同士の折り合いも悪かったから、こちらとしてもちょうどよかったとも言える。彼女がうちに来るときにはワインレッドのフェアレディZで颯爽と来た。

しかし、だんだん我が家はたばこ臭い家になっていった。彼女はかなりのヘビースモーカーで、僕が昼のうちに仕事から戻ると、必ずキッチンで不機嫌な顔をしながらプカーッとたばこをふかしていた。



ここは場末のバーか、というような感じだった。

もちろん、気の弱い僕は面と向かって注意する勇気なんてない。

彼女が帰ってからかみさんに何気なく告げ口をするのだが、お手伝いさんがいなくなったら困る、の一点張りで僕はすくすく従うしかなかった。そういえば祖母もお手伝いさんとの折り合いが悪かったことを思い出した。

どこの家でも同じなのか。外部の人間が入ってくるということは、よほど気が合うか、

気を遣い合わないといけないということなのか。

結婚したての半人前の自分としては、これは勉強なのだ、と言い聞かせ、その時間は透明人間になって過ごした。

とはいえ、彼女が帰った後の夜は雰囲気ガラッと変わった。

2件隣の家に住む大学生姉妹がボーイフレンドたちを連れて、毎日のようにうちに遊びに来るようになったからだ。

昼は場末のバーでも、夜は学食になった。

なぜかかみさんは彼らにご飯を作って食べさせ、

代わりに大学の恋愛事情とかを聞く。

いくつかの話はきっと詞の中に織り込まれていったはずだ。

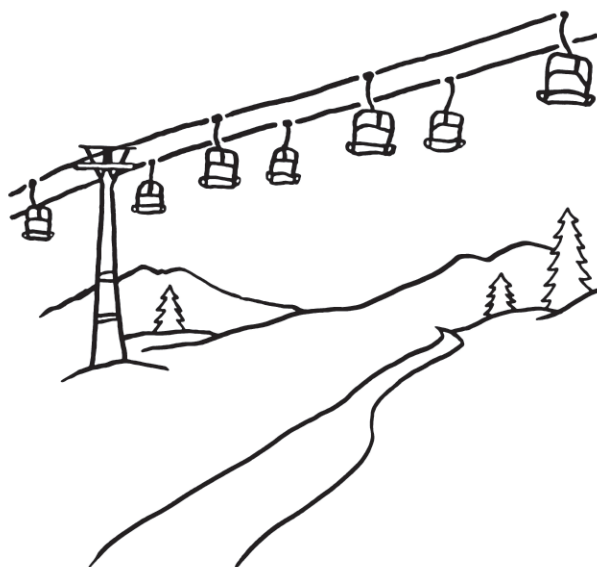
そしてあるとき、スキー帰りにうちに寄った彼らは、

スキー場でコンサートやりましょう、などと

冗談交じりに提案したのだった。

今年で46年目になる苗場でのコンサートは、

こんな軽い会話から始まったのだから笑ってしまう。



松任谷 正隆（まつとうや まさたか）

作編曲家、音楽プロデューサー。

4歳からクラシックピアノを習い始め、14歳の頃にバンド活動を始める。

20歳の頃プロのスタジオプレイヤー活動を開始し、

バンド“キャラメル・ママ”、“ティン・パン・アレイ”を経て、数多くのセッションに参加。

その後アレンジャー、プロデューサーとして多くのアーティストの作品に携わる。

鈴木茂、小原礼、林立夫とともにバンドSKYEを結成。

2021年10月、デビューアルバム「SKYE」をリリース。

日本自動車ジャーナリスト協会に所属し、「日本カー・オブ・ザ・イヤー」の選考委員も務める。

著書に「松任谷正隆の素」「おじさんはどう生きるか」などがある。